

令和3年度

はなたて 花立遺跡現地説明会資料

令和3年10月30日（土） 加茂市教育委員会

1 はじめに

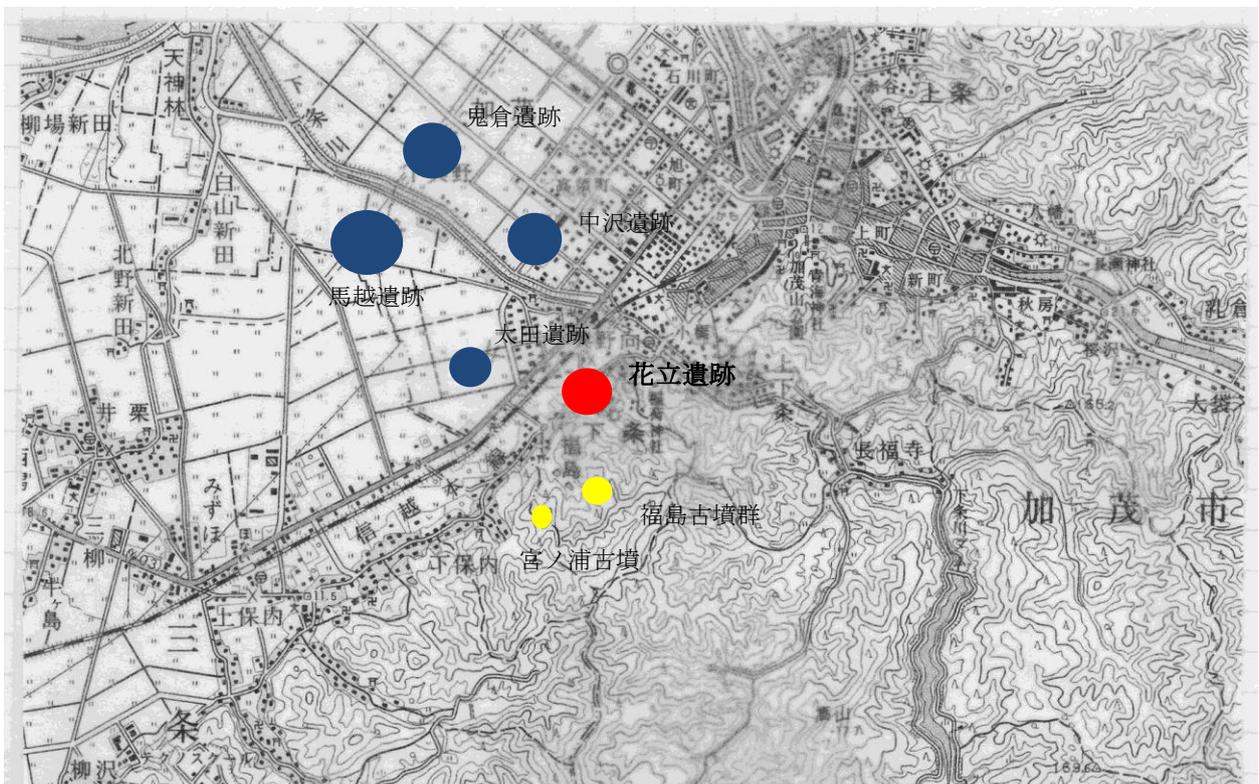
花立遺跡は加茂市大字下条字福島地内に所在します。遺跡は平成5年に登録されました。市道福島線建設工事に先立ち、令和元・2（2019・20）年度に行った^{かくにんちようさ}確認調査の結果、道路建設予定地内に遺跡がひろがることが明らかとなり、令和2年度に約914㎡、本年度は9月終わりから、約469㎡を対象とした^{はくつちようさ}発掘調査を加茂市教育委員会が主体となり実施しています。

2 立地と周辺の遺跡

花立遺跡は下条川左岸の丘陵縁辺部に位置し、緩やかな傾斜を持つ^{びこうち}微高地に立地します。現在の水田面の標高は約13m前後です。

下条川流域には多くの古代の遺跡が確認されています。発掘調査された遺跡は右岸側で^{おにくら}鬼倉遺跡、^{なかざわ}中沢遺跡、左岸側では^{うまこし}馬越遺跡、^{おおた}太田遺跡があります。ほとんどが8世紀中頃に集落が開発され、9世紀中頃～後半を主体とし、10世紀前半頃まで継続しています。

花立遺跡の後背部の丘陵には^{みやのうらこふん}宮ノ浦古墳（1基）、^{ふくしまこふんぐん}福島古墳群（5基）が所在します。



花立遺跡と周辺の遺跡位置図

3 遺構について

昨年度の調査区では掘立^{ほったて}柱^{ばしら}建物^{たてもの}が1棟見つかりましたが、今年度は未確認です。ただし、柱^{ちゅうこん}根^{こん}がのこる柱^{ちゅう}穴^{あな}がいくつかあることから、調査区外にかけて建物がひろがることが予想されます。また、小さいながらも多くの円形の柱^{ちゅう}穴^{あな}が確認されており、複数の建物が存在したものと推測できます。このほか、大型の土坑（長軸で約2.2～2.7m）が3基みられ、類似した覆土の堆積や多量の土器が出土することなど共通点が多く、同様の目的で掘られた遺構と思われます。また、南北方向に延びる溝や昨年度の河川1の右半分を調査しました。昨年度に比べて、遺構の密集度が高く、集落の中心区域に相当すると考えられます。

4 遺物について

河川や溝から多量の須^す恵^え器^き・土^は師^じ器^きが出土しています。須^す恵^え器^きは大半が佐^さ渡^{わた}の小^こ泊^{ぼり}窯^{よう}産^{さん}のもので、年代は平安時代の9世紀中～後半頃が中心です。墨書や漆書が多く見られ、「上」の字が目立ちます。特筆すべきは、「□粟生田」・「下粟生田家」の4～5字の墨書土器です。「粟生田」は、三条市保内地区にあったとされる粟^あ生^お田^{うだ}保^ぼにつながります。粟^あ生^お田^{うだ}保^ぼが史料に初めてみえるのが元弘4（1334）年のこととされているので、今回の墨書土器は粟^あ生^お田^{うだ}という地名が約500年ほどさかのぼり、9世紀頃には存在したことを示しています（帝京大学文学部准教授 相澤 央氏のご教示）。昨年度出土した「田□〔領カ〕」（郡雑人で郡司が在地の有力者を任命し、田地の管理を行った人）とあわせ、大変重要な墨書土器です。また、加茂市で初の出土となる円^{えん}面^{めん}硯^{けん}の脚部破片1点が注目されます。手慣れた風の墨書とあわせ、文字に習熟した人物の存在を裏付けます。土器以外では、土^ど錘^{すい}（漁^{ぎょ}網^{あみ}に付ける^{おもり} 錘^{はし}）や箸^{まげ}状^{もの}、曲^ま物^{もの}、皿^まなどの木製品が出土しました。

5 まとめ

花立遺跡は古代蒲原郡青海郷^{かんばらくんあおみごう}の地域を開発した有力者の集落で、特に田地の管理に関係したことを示唆する遺物（墨書土器や木簡など）が多くみられることから、農業経営の拠点であったと推測されます。今後は「三宅」・「妙越庄」など初期荘園に関係した墨書土器が出土している馬越遺跡や三条市域にある古代の遺跡などとの関係を考えていく必要があります。

最後になりますが、今回の発掘調査並びに説明会を開催するにあたり、近隣にお住いの皆様、関係機関の方々、㈱日立ニコトランスミッション加茂事業所様から多大なご協力を頂いております。この場をお借りして感謝申し上げます。